

大正十二年三月

情報彙纂 第三

朝鮮評論(KOREA REVIEW)
米國著書及獨逸新聞

記事摘要

朝鮮情報委員會

目次

第一 朝鮮評論

一九二〇年十一月號……………一頁

第二 米國著書

「韓國ノ復興」ノ梗概……………一六

第三 獨逸新聞

伯林日報……………二三



彙纂 第一

朝鮮統治ニ關スル外國人ノ批評

第二

朝鮮評論(Korea Review)
布哇國民報及獨逸新聞 記事摘要

朝鮮評論米國著書及獨逸新聞記事摘要

(情報彙纂第三)

第一朝鮮評論 (Korea Review)

在米國費府排日鮮人宣傳機關朝鮮情報局發行

第二卷第九冊一九二〇年十一月號記事摘要

一 日本ノ脅威

米國人ニシテ日本人ノ真相ヲ了解セル者ハ、千人中一人アルニ止マラム。米國人ハ日露戰爭後漸ク明確ニ日本人ヲ支那人ト同一視スルノ非ヲ覺リ、爾來東洋新興國民トシテ稱讚ヲ極メ、政府モ爲ニ其ノ對日政策ヲ一變シ、努メテ其ノ好意ヲ開拓セムトスルニ至レリ。其ノ結果、米國ハ條約尊重ノ傳統的精神ニ反シテ日本ノ韓國篡奪ヲ默認シ、事實上東亞ニ於ケル日本ノ自由手腕ヲ許スニ至レリ。是レ日本外交政策ノ成功ナリシナリ。日本ハ又一方英國ノ恐露心、次ニ恐獨心ヲ利用シテ日英同盟ヲ訂立シ、以テ其ノ地位ヲ鞏固ニシタリ。然ルニ日本ハ世界列國ノ信望ヲ博スヘキ此ノ好機會ニ際シ、其ノ策ヲ錯リテ獨逸軍國主義者ノ蠱ニ倣ヒ、先ツ亞細亞ヲ征服シ、次ニ他ノ世界各國ニ及ホサムトスル侵略的帝國主義ヲ確立シタリ。

斯クテ日本ハ朝鮮ヲ保護國トシ、次テ之ヲ併合シテ大陸進取ノ踏石ト爲シ、更ニ滿洲ヲ掌握シ腐敗無智ノ支那官吏ヲ脅壓シテ北京政府ヲ左右スルノ稷子ト爲シ、支那ヲシテ第二ノ朝鮮タラシムコトヲ夢想シタリ。日本ハ又英米ヲ強制又ハ籠絡シテ日本ノ支那管理ニ同意セシムトシ、先ツ米國ヲシテ支那ニ於ケル日本ノ特殊利益ヲ承認セシメ、其ノ後米國ノ承諾ヲ經スシテ「特殊」ノ文字ヲ「優越セル」ニ變更シ、爲ニ米國政府ノ抗議ヲ招ケリ。日本ハ又巴里平和會議ニ於テ著大ノ成功ヲ收メタリ、日本ハ巧ニ米國人及濠洲人ニ人種平等案畏怖ノ感情ヲ煽揚シ、聽テ之ニ讓歩シテ山東獲取ノ代償ヲ得タリ、斯ノ如クニシテ日本ノ外交ハ著々好果ヲ奏シタリト雖、他ノ諸強國ハ之カ爲漸ク日本ノ術中ニ陷レルヲ感知シ、日本ニ對スル不信ノ感情其ノ間ニ醸成セラレ、日本ノ朝鮮ニ於ケル暴虐、西伯利ニ於ケル露國利權ノ篡奪。支那ニ於ケル高手的強壓ノ繼續等ノ事實漸次外界ニ知レ渡ルニ及ヒ、一種ノ猜視極東ノ形勢ニ集注セララルニ至レリ、此ノ時ニ當リ加州排日運動再發セルカ、日本ハ必ス又之ヲ利用シテ、自家最善ノ利益ヲ圖ルノ具ニ供スヘシト吾人ハ信ス。

今日ノ割切ナル問題ハ日本カ對亞細亞帝國主義的經畫ヲ成功セシ場合ノ結果如何ニ在リ。米國ハ東亞ニ對シテハ日本ト開戰ヲ賭スル程ノ利害關係ナシト思惟シ、或ハ曰ハム、支那ニ於テモ、又西伯利ニ於テモ恰モ曩日ノ朝鮮ニ於ケルカ如ク、彼進マハ我退クノ外ナシ、是等地方ニ於ケル貿易及勢威ノ損失ハ此ノ戰禍ノ大ナルニ比スヘクモアラサレハナリ。吾人ハ唯日本ノ蠶食橫暴其ノ度ニ過クルノトキ言議ノ抗爭ヲ爲

スニ止メムノミト。日本ハ米國ノ此ノ輿情ヲ知り、日本ノ政治家ハ何レノ強國ト雖敢テ日本ノ國策遂行ヲ抑止スルモノナシト信シ居レリ。

日本ハ英米ノ提起スルコトアルヘキ各種ノ抗議ヲ豫測シテ、之ニ對スル有ラユル尤モラシキ答辯ヲ準備シ居レリ。北樺太等占領ニ關スル米國ノ抗議ニ對シテハ、是レ自衛上已ヲ得サルノ處置ニシテ、占領地ハ適當ノ時期ニ還付スヘシト答へ、朝鮮ニ於ケル暴虐ニ關スル英國ノ抗議ニ對シテハ、是レ誇大ノ報告ニ基ケルモノナリ、日本ハ既ニ朝鮮施政ノ大改革ヲ行ヒテ多大ノ自由ト公正トヲ土民ニ與ヘタリト答へ、山東占領持續ニ關スル支那ノ抗議ニ對シテハ、支那ニシテ直接商議ヲ開カハ適當ノ時期ニ之ヲ返還スヘシト答ヘタリ。日本ハ斯クテ豫期ノ成功ヲ收メタルモノノ如ク、何人モ復是等誓約ノ實行ヲ監視スルノ責任ヲ取ル者ナキナリ。故ニ直接利害關係ヲ有スル當事國ニシテ自カラ奮起シ、其ノ人命ヲ賭シテ利權ノ恢復ニ努メスムハ、今後數年間ハ依然此ノ状態ニ在ルヲ免レサルヘシ。

日本ニ關スル諸問題中直接英米ノ利害ニ關係スルモノハ米國及濠洲ニ對スル日本人移住問題ナリ。然ルニ英米ハ真正面ヨリ之カ解決ヲ爲スヲ好マス。日本移民ハ朝鮮、滿洲、西伯利ノ如キ地方ノ風土ニ適セス特ニ米國太平洋岸及濠洲ノ或部分ノ如キ土地ヲ喜ヘリ。加州及濠洲ノ人民ハ各其ノ中央政府カ偏ニ日本ノ驕心ヲ得ムトスルノ意アルヲ熟知シ、少クトモ其ノ政府ニ對シ極端ナル反抗的態度ヲ執リ、結局將來ノ戰因タルヘキ紛糾收拾スヘカラサル難問題ヲ形成シツツアリ。

日本人ハ加州及濠洲ノ移住制限ヲ人種的差別待遇ト認メテ深ク之ヲ憤慨セルモ、其ノ現在ノ微力ニ顧ミテ開戦ノ自殺的ナルヲ覺悟セリ。同國人民中熱狂ナル日米開戦論者ナキニ非サレトモ、爲政者及主導者等ハ極力之ヲ抑制シテ寧ロ將來ニ對スル開戦準備ヲ主張シ、之カ必要ナル準備材料ハ朝鮮、支那及西伯利ニ於テ獲得シ得ヘキカ故ニ、吾人ハ先ツ以テ此等疆土ノ把握ニ全力ヲ盡ササルヘカラスト曰ヘリ。英米兩國ハ戦争ヲ厭フノ念強キカ故ニ、或ハ日本ノ亞細亞侵略ヲ重大視セスシテ依然放任政策ヲ執ルナラム。果シテ然ラハ日本ハ其ノ間ニ息繼キノ餘裕ヲ得、他日自己ノ便宜ト發動トニ依リテ此ノ問題ヲ解決スルノ準備ヲ完成スルニ至ラム。

日本ノ是種ノ準備ヲ抑止スヘキ機會唯一アリ。开ハ利害關係ノ直接當事者タル朝鮮人、支那人及露西亞人ノ精神的運動是ナリ。是等國民中僅々一割ノ民人ニテモ日本ノ侵略ヲ抑止セムト決意セハ、其ノ事成リ難キニ非ス。故ニ吾人ハ是等諸國民カ速ニ起ツテ侵撃者ニ打撃ヲ加ヘ、啻ニ其ノ主權ヲ回復保全スルノミナラス。延テ他ノ世界的戰亂ヲ防止スルノ主要機關タラムコトヲ望ム。

二 日本人ノ諧謔

「セウル・プレス」ノ政府機關新聞ナルコトヲ叙シタル後、入鮮米國議員團暗殺計畫ニ關スル同紙ト「神戸クロニクル」紙トノ論争ヲ評シ、前者カ朝鮮人心理ヲ誤解シ、敵ト友トヲ區別スル能ハサルカ如ク論セルハ滑稽ナリ。斯ル言論ハ内鮮人間ノ惡感ヲ增長シ、記者ト其ノ國民ニ世ノ嘲笑ヲ招來スルニ止マラム云々。

三 日本ノ朝鮮改革

日本ノ所謂改革ナルモノハ、鮮民ニ自由ト光明トヲ與フヘキ總テノ機關、殊ニ言論集會ニ對シ猶強壓ヲ加フト冒頭シテ、新聞發行停止及記者拘禁ノ頻繁ナル事例ヲ擧ケ、更ニ其ノ專制的迫害ノ手ハ米國宣教師發行ノ宗教雜誌ニ及ヘリトテ、「セウル・プレス」紙ヨリ「宗教雜誌ノ差押」ト題スル「ゼロールド・ボンウヰック」ノ投書全文ヲ轉載セリ。

次ニ集會ノ取締ハ一層峻嚴ニシテ警察ノ許可ナケレハ、朝鮮人ハ三人以上公的ニ集會スルコトヲ得ス宗教的集會スラ警察探偵之ニ臨ミ、其ノ不穩當ト思惟スル言説アラハ、何時ニテモ解散ヲ命スル權能ヲ有スト記シ、其ノ適例トシテ入鮮米國議員「ハースマン」ノ事件ヲ擧ケ、中央基督教青年會ノ歡迎會ニ於テ、警官憲兵ハ氏ニ退場ヲ命シ、高壓的ニ其ノ會ヲ解散シ、氏ハ侮辱セラレ、會衆ハ散々打擲セラレタリ。此ノ時米國領事ニ急ヲ告クルコトナク、且其ノ來場今少シ遅カリシナラムニハ、氏ハ此レ以上ノ虐待ヲ受ケシヤモ知ルヘカラサリシナリ。之カ爲氏ハ爾後國賓タル待遇ヲ辭シテ個人的旅行ヲ爲シ、日本官憲トノ接觸及其ノ不誠實ナル接待ヲ避ケタル程ナリキト記シテ、「セウル・プレス」紙ヨリ「トーマス・ホツブス」ノ投書ヲ引用シテ之ヲ證シ、更ニ「ホノルル」發行「バシフイツク・コンマーシヤル・アドヴァータイザ」紙上ノ「ハースマン」氏ノ談話ヲ轉載セリ。其ノ談ニ曰ク「朝鮮人ハ獨立ヲ與ヘラレスムハ、皆寧ロ死滅シ、若クハ邦土ヲ退去スルノ意アリ。彼等ハ痛ク日本ノ壓制ニ苦ミ、日本ノ臣民タルヲ願フ者ナシ。京城朝鮮人ノ數

迎會ニ於テ警察官ハ予ニ退場ヲ求メ、強制的ニ予ヲ突キ出サムト試ミタリ。米國總領事來場ノ頃ニハ日本人等ハ多勢ヲ以テ已ニ會衆ノ解散ヲ遂行シ居タリ。彼等ハ其ノ數遙ニ會衆ノ人員ヨリモ多ク、無慘ニモ朝鮮人ヲ歐打セリ。予ハ是等ノ行動ニ對シ抗議ヲ試ミタレトモ其ノ效ナカリキ云々」

眼前ニ斯ノ如キ證據アルニ拘ラス、親日論者中猶朝鮮改革ノ誠意ヲ唱フル者アルハ自カラ欺クカ若クハ人ヲ愚ニスル者ノミ云々。

四 日本ノ所謂宗教寛容

日本ノ既定政策カ日本ノ勢力圏内ニ於テ條約上ノ拘束ヲ受クルコトナキ場合極力基督教ノ滅絶ヲ圖ルニ在ルハ今ヤ又疑ヲ容レス。朝鮮及山東ノ事例及日本諸新聞ノ論調ハ以テ之ヲ證スルニ足レリ。「紐育ヘラルド」紙上「ウォールサー」監督ノ報告ニ依レハ「マリアナ」「カロリン」及「マーシャル」群島ニ於テ夫、日本ハ、其ノ委任管理權ヲ受クルヤ、先ツ第一ニ基督教宣教師ノ放逐ヲ念トシ、既ニ日本汽船ニ依リテ其ノ總テヲ横濱ニ輸送シ、同地ヨリ夫夫歸國セシムルコトトシタリト云フ。是レ土民ヲ神道化セサル迄モ、少クトモ在來ノ迷信ニ委スルモノニシテ、文化史上鼻持ノナラヌ行動ト謂フヘシ。由來日本ノ宣言ハ信ヲ措クニ足ラス、前ノ大隈首相ハ日本ハ領土擴張ノ意思ナシト明言セシモ、支那ニ所謂二十一箇條ノ要求ヲ強ヒ、青島還付ノ宣言モ今尙其ノ實現ヲ見ス。其ノ他韓國ニ對スル誓約ノ破棄、對米紳士條約ノ違犯、滿洲ニ於ケル門戶開放主義ノ無視等不信ノ實例枚舉ニ違アラス。日本ハ東亞「モンロー」主義ヲ主張スルモ

其ノ目的米國ノ夫レト趣ヲ異ニシ、常ニ近隣ヲ脅迫シテ他ノ土地ヲ蠶食シ、外國領土ニ恐怖時代ヲ起シ、博愛義俠ノ宣教師ヲ攻撃シ、土民ノ土地財産ヲ沒收スルノ口實ト爲スニ過キス。日本ノ「モンロー」主義ハ東亞全部ヲ占有セムトスル利己的辭柄ニシテ、現代ニ於ケル世界ノ脅威ナリ。之ヲ打破スルノ道ハ唯日本ヲシテ其ノ東亞進取ノ一橋梁タル朝鮮半島ヨリ退去セシムルアルノミ云々。

五 又モヤ日本ノ金地

日本ノ軍國主義者ハ決シテ活動ノ手ヲ緩ムルコトナク、常ニ世界征服ノ實現ニ其ノ步武ヲ進ムルノ機會ヲ狙ヘリ。此ノ帝國主義的夢想ハ秀吉ノ朝鮮征伐ニ發端シ、明治年間新海陸軍ノ建設成ルニ及ヒ、再ヒ其ノ萌芽ヲ發シ、先ツ日清戰役ヲ起シ、尋テ露國ト開戰シ、益軍備ヲ強大ニシテ領土ノ擴張ニ腐心シ其ノ第一着手トシテ致命的ノ軍略的策源地タル朝鮮ヲ占領セリ。尋テ世界大戰ノ勃發スルヤ、直ニ之ニ參加シテ青島及南洋諸島ヲ略取シ、歐洲強國ノ極東ヲ顧ミルニ違ナキニ乘シ、支那ニ所謂二十一箇條ノ要求ヲ強ヒ、以テ日本ノ權勢ヲ完全ニ支那ニ確立セムト期シタリ、此ノ危機ニ際シ、該要求ノ内容外界ニ漏レテ他ノ諸條約國殊ニ米國ノ抗議ヲ惹起スルコトナカラシメハ、此ノ支那壓服ノ計圖ハ全部實現スヘカリシナリ。其ノ後日本ハ更ニ西伯利ニ出兵シ、當初派兵數ヲ一國七千五百以下トストノ聯合國間ノ協定ニ反シテ、潛ニ七萬五千ノ大兵ヲ送り、列國撤兵後モ尙兵ヲ留メ、遂ニ北樺太及西伯利東岸ノ要地ヲ占領シ、又モヤ日本ノ地金ヲ現ハセリ。

近時一隊ノ馬賊、琿春ヲ襲ヒテ若干ノ朝鮮人ヲ殺戮セリトノ報アリ。是レ日本人又ハ他國人ニ變裝セル日本人ノ煽動ニ因ルモノナルヤ明ナリ。而シテ日本ハ朝鮮人保護ノ口實ニ依リ同地方ニ六大隊ノ兵ヲ派シタルモ、其ノ實武力ニ依リテ朝鮮人ヲ制御セムトスルモノナリ。而シテ之ニ關スル支那ノ抗議ニ對シテハ益派兵數ヲ増加シテ之ニ答ヘタリ。是レ滿洲全部ノ占領、移住朝鮮人ノ驅逐、亞細亞大陸征服ノ素地ヲ意味スルモノニ非スヤ云々。

六、二ツノ仕草

日本政府ハ二ツノ意味アリゲナル仕草ヲ爲セリ。其ノ一ハ兵役ニ關係ナキ各階級ノ人々ニ對シ開戦ノ場合軍務ニ服スルノ意アルヤ否トノ試問ヲ發シタルコト、其ノ二ハ支那カ支那領内ノ治安維持ニ日本ト協同セストノ口實ヲ以テ支那領タル間島ニ出兵シタルコト是ナリ、日本ハ米國大統領ノ更迭ニ伴ヒ、山東問題ニ關スル米國ノ態度ノ一變セムコトヲ恐レ、頻リニ日米交渉ヲ急キ、且豫メ該交渉ノ失敗ニ歸シタル場合ヲ慮リ、第一ノ仕草ヲ以テ米國ニ警告ヲ與ヘムトスルナリ。第二ノ仕草ハ滿洲ヲ占領シテ東亞征服ノ橋渡シタル朝鮮ヲ包擁掩護セムトスルノ底意アリ。日本ハ支那管理、全東亞統御ノ目的ヲ達スルカ爲ニハ、或ハ已ムナク米國ト戰フコトアルヘキヲ覺悟シ、之カ準備ヲ整ヘツツアリ。而シテ之ヲ抑止スル最モ確實ナル手段ハ朝鮮ノ獨立ヲ回復セシムルニ在リ、而モ猶日本ニシテ樺太又ハ臺灣ヲ通シテ大陸ニ手ヲ伸サムトセハ、此ノ兩地ヲモ取り去ルヘキナリ。是等モ朝鮮ト等シク日本ノ竊取シタルモノナレハナリ云々。

七 朝鮮人ノ要請

米國議員團ノ入鮮ニ際シ朝鮮市民委員會ヨリ同團ニ提出シタル陳情書ノ全文ヲ掲ク、其要旨左ノ如シ。
朝鮮人民ハ深ク米國ニ信賴ス。米國ハ自由正義ヲ建國ノ精神トシ米鮮修好以來巨多ノ貴重ナル物資ヲ我等ニ送り且多數ノ材幹アル人物ヲ我ニ派シテ教育、衛生、宗教其ノ他文化向上ノ施設ノ先驅ヲ爲サシメ、其ノ人民ノ大多數ハ我等ニ同情ヲ寄せ、殊ニ何等報償ヲ念トスルコトナク、專ラ純然タル人道公義ヲ愛スルノ精神ヨリ我等ノ爲ニ力ヲ致シタレハナリ。

今日諸士ヲ接待スル者ハ皆我カ仇敵ニシテ我等ノ歴史、言語及傳説ヲ破壊シ、自家ノ政治及經濟的利益ヲ開拓スルニ專ラニシテ、我等ニ大害ヲ加ヘタル者ナリ、我等ノ敵ハ諸士ニ朝鮮開發ノ現狀ヲ示シ、日本施政ノ誠意ト惠澤トヲ諸士ニ告ケム。然レトモ我等朝鮮人ノ事功ト其ノ固有ノ文化トハ彼等ノ常ニ隠蔽スル所ナリ。朝鮮ノ物質的進歩ハ之ヲ認ムヘキモ、諸般施設ノ裏面ニ潜メル日本ノ動機ト之カ爲朝鮮人ノ誅求セラレタル犠牲トハ神人ノ共ニ怒ル所ナリ、諸士ニシテ仔細ニ事ノ真相ヲ探究セハ、監獄處遇ノ一事項ニミニテモ、我等朝鮮人ノ自由ヲ求ムル不撓ノ精神ト頑冥ナル日本ノ普魯西主義トノ衝突ノ狀ヲ了解スルニ餘リアラム。今日諸子ノ目撃スル監獄處遇ノ改善ハ諸子ノ眼前ヲ粉飾スルモノニ過キス、今日以前ニ在リテハ幾多ノ愛國者、男女老少ノ別ナク、頻繁ニ此ニ詰込マレ、朝鮮人牧師ニシテ獄ニ投セラレサリシ者殆トナク、就縛入牢ハ今日朝鮮ニ於テ一種ノ流行ヲ爲セルノ實況ナレハナリ。諸子ハ既ニ其ノ見聞セン所

ニ依リ、朝鮮人民ノ自由ヲ熱求スル努力ト犠牲トノ如何ニ深甚ナルカヲ看取セルナラム。諸子ノ聲ハ必スヤ歐米ノ大局ヲ動かスニ足ルモノアラム。願クハ諸士我等ニ諸士ノ援助ヲ與へ、朝鮮民族ノ努力ト犠牲トヲシテ徒爾ニ了ラサラシメムコトヲ云々。

八 朝鮮ノ友

朝鮮ノ最モ熱烈ナル同情者トシテ目下歸米中ナル京城「セヴァランス」病院醫師、醫學博士「エーチ・シ―ホワイチング」氏ノ事ヲ掲ケ、氏カ米國西部ニ於テ朝鮮ニ關シ既ニ二百六十六回ノ講演ヲ爲シ、「アイオワ」州「ウオタール」ノ基督教長老會ハ氏ノ演說ニ感動シテ朝鮮ノ同教徒ニ對シ同情ヲ寄セ、且他ノ諸教會カ氏ニ講演ノ機會ヲ與フルコトヲ望ム旨ノ決議ヲ爲セリ云々ト記ス。

九 切 拔 通 信

本項記事注目スヘキモノ左ノ如シ。

米國議員東洋視察團ノ一員タリシ代議院外交委員長「スチーヴン・デー・ポーター」氏ノ視察談ニ曰ク、支○鮮○及○比○律○賓○人○等○ノ○殆○ト○米○人○ヲ○崇○拜○ス○ル○ノ○狀○ア○ル○ニ○反○シ、日○本○人○ハ○米○國○ニ○對○シ○敬○遠○的○嫌○忌○心○ヲ○懷○キ、裏○面○ニ○排○米○的○感○情○ノ○暗○流○ア○リ。日本ノ新聞及公人中今尙日米戰爭ヲ云爲スル者多ク、米國ヲ以テ日本膨脹ノ最大ノ敵ナリト看做セリ。日本ノ主戰論者ハ軍人及資本階級ヨリ成リ、農夫其ノ他ノ常民ハ戰爭ニ反對ス云々。(「バブリック・レツチャー」所載十月十三日「ピッツバーグ」發信)

米國「ミネソタ」州選出代議院議員「シヨール」氏ハ曰ク、日本ノ墨西哥「ターツル」島武装ノ報ニハ予ノ手許ニ確實ナル證據アリ。米國ニ對スル日本ノ脅威的態度ハ主トシテ日英同盟ヨリ來レルモノナリ。日本ハ該同盟ノ力ニ依リ獨領太平洋諸島ノ大部分ヲ手ニ入レ今ヤ大ニ之カ要塞設備ニ力ヲ注キ「ターツル」島ヲ終點トシテ西半球殺到ノ連鎖タラシムトス云々。(九月六日華盛頓發信掲載新聞不詳)

十「ハーデンク」ノ勝利

氏ノ勝利ハ平和條約第十條ノ效力ヲ存スル限リ米國ノ國際聯盟不參加ヲ意味ス。氏ハ現聯盟ノ改造又ハ正義ノ原則ニ依ル新聯合ノ組織ヲ企テ、全然聯合各國ノ無私的協戮ト好意トヲ基礎トシテ之ヲ運用シ四五強國ノ武力ヲ其ノ樞軸トスルノ主義ヲ排斥スルナラム。是レ此等強國中小弱國ノ處遇宜シキヲ得サリシ者アルニ見テ其ノ妥當ナルヲ知ルヘク、米國ニシテ其ノ新經綸ノ主導者タラハ、必スヤ其ノ成功ヲ齎ラシ正義公道ノ新意義萬國民ノ間ニ發露スルニ至ラム云々。

十一 極東ノ形勢

一九一九年巴里平和會議朝鮮代表朝鮮民國歐米委員長金奎植述

(一) 緒言 英米兩國ノ提携ハ「ロイド・ヂョーヂ」氏ノ聲明セシ如ク、世界ノ改造殊ニ歐洲ノ經濟的及政治的安定ト亞細亞大陸及太平洋諸海ノ平和、開發トノ促進ニ須要ナルヲ疑ハスト雖、斯ノ如キ協同ノ精神モ、將又世界革新ニ必要ナル理想モ、未タ實行セラレタル跡ナキナリ。

(二) 舊來ノ政策 弱小國民ハ從來常ニ強大國ノ領土擴張策ノ犠牲ト爲レリ。朝鮮ノ獨立ト領土保全トノ保障ハ日英同盟約款ノ改定ニ依リテ日英間ニ印度及其ノ邊境ノ安全ト交易セラレ、日露講和條約ハ朝鮮ニ對スル日本ノ保護權ヲ認メタリ。此ノ二訂約ナカリシナラムニハ北米合衆國カ結局日韓併合ニ終リタル韓國保護ノ協約ヲ默認スルコトナカリシナラム。一九〇五年(明治三十八年)ノ日英同盟約款改訂ニ際シ在京城英國公使ニ對スル舊韓國政府ノ抗議ノ願ミラレサリシカ如ク、今日現日英同盟ノ延長ニ關スル支那ノ抗議亦或ハ同一運命ニ陷ルナラム。由來歐洲列國ノ東亞政策ハ支那ニ於ケル勢力範圍ノ設定擴張、日本ノ對支二十一箇條要求ニ關スル態度、山東ニ關スル戰時中ノ密約等ニヨリテモ明ナル所ナリ。然ルニ獨リ米國カ此ノ間ニ立チテ、毫モ高壓的術策ニ出テス、往々國際正義ノ保持ニ努メタルハ、世人ノ満足スル所ナリ。然レトモ米國ノ東洋政策モ時ニ餘リ多ク亞細亞ニ於テ他ノ強國殊ニ日本トノ衝突ヲ避クルノ便宜主義ニ流レタルコトナキニ非ス。同國カ日本ノ朝鮮橫領ヲ默過セシカ如キ其ノ著例ナリ。就中支那及西伯利ニ於テハ眞ノ友誼的援助ト協同トカ各關係者ノ利益タルヘキ場合ニ極端ナル放任政策ヲ執リタル事例少カラス。米國ノ對支借款團脫退、西伯利撤兵等ノ如キ即チ其ノ尤ナルモノナリ。吾人カ此ノ苦言ヲ呈スルハ、徒ニ批難ヲ試ミ、若クハ咎ヲ英米兩國ニ歸セムトスルカ爲ニ非スシテ、單ニ極東現下ノ實狀ヲ摘示シテ、兩國カ眞向ヨリ公正ニ本問題ニ對應センコトヲ希望スルニ外ナラス。今ヤ世界ハ國際正義、特ニ小弱國民及被壓民族ニ對スル國際正義ノ新時代ニ入ラムトス。故ニ「ロイド・ヂョーデ」氏ノ説クカ如キ英米ノ提携ハ歡迎

的○反○響○ヲ○受○ク○ヘ○キ○モ○ノ○ナ○リ○ト○ス○。

(三)利害關係 東亞問題ハ英米自體ノ利害ニ致命的關係ヲ有ス。蓋ニ兩國共通ノ文化的理想ノ保持ニ於テ然ルノミナラス、太平洋上ニ於ケル其ノ政治及貿易上ノ利權ニ在リテモ亦其ノ揆ヲ一ニス。由來日本ハ巧ニ歐洲文明ヲ假裝シテ、英米兩國ノ默認ノ下ニ、其ノ軍國的威力ヲ確立シ、英國ノ植民國タル位置ヲ利用シテ、漸次其ノ領土ヲ擴張シ、今ヤ亞細亞ノ最強國タル地位ヲ占メ、更ニ進ミテ所謂「吉田案」(吉田松陰ヲ指スモノナラム)タル亞細亞經路ノ宿望ヲ實現セムトスルノ首途ニ在リ。是レ英國カ曾テ其ノ興隆ノ助成ヲ得策ト思惟シタル當ノ國民ノ爲、自己カ多年辛勞ノ成果ヲ、今ニ於テ、略取セラレムトスルノ皮肉ニ非スヤ、滿蒙、福建、廣東、楊子江流域並支那貿易ノ現狀ハ皆此ノ影響ニ依ル英國ノ勢威利益ノ失墜ヲ語ラサルハナキナリ。

(四)亞細亞ニ於ケル歐米排斥 日本ノ亞細亞經路策ニシテ其ノ推移ニ放任セラルレハ、英米及他ノ歐洲諸國ハ日本ノ自由手腕獲得ノ爲東亞ヨリ退去セサルヲ得サルニ至ルヘク、日英同盟約款第三條末項ノ機會均等主義ノ條件ノ如キハ既ニ空文ニ終レルモノト謂フヘシ。現ニ朝鮮ニ於テハ歐米諸國ノ利權ハ事實上皆買收セラレテ總督府ノ管理ニ歸シ、鑛業權ノ如キモ外人ニ對シ法令上新規取得ヲ禁シ、既得ノ特權スラ任意ニ變更又ハ停止セラレムトス。朝鮮ノ關稅制度改正ハ外人ヲシテ新規ニ貿易上ノ利益ヲ開拓スルヲ得サラシメ、臺灣、滿洲、青島等苟モ日本ノ勢力優越セル地方ニ於テハ、到ル處皆然ラサルハナシ。而シテ是レ

皆既往二十五年殊ニ日露戰役以來ノ經過ナリ。今ヨリ十年又ハ十五年後ノ情勢果シテ如何ナルヘキカ。

(五)日本ノ地理的現位置　亞細亞大陸ヲ包擁シテ難攻不落ノ障壁ヲ爲セル日本島帝國ノ地勢ハ、今ヤ南洋諸島ト樺太ノ北半トヲ合ハセテ、軍略上更ニ其ノ鞏固ヲ加ヘタリ。日本ハ大陸ニ於テハ露國勢力ノ失墜ニ乘シテ其ノ手ヲ外蒙古ニ伸ヘ、「イルクーツク」以東ノ西伯利ヲ武力統制ノ下ニ置キ、更ニ揚子江流域ニ於ケル英國ノ航海、鑛業其ノ他ノ利權ヲ排除シ、且山東ヲ領有シテ支那ノ中心ニ喰入リ、事實上東亞大陸全般ヲ管制スルニ至レリ。

(六)米國ノ損失　東亞ニ於ケル米國將來ノ損失ハ英國ニ比シテ更ニ甚シキモノアラム。米國ハ戰時中著シク對支那貿易ヲ増進シ、加フルニ其ノ擴大セル生産力ヲ以テシテ、將來益之カ發展ヲ見ルヘキ狀勢ニ在リト雖、此ノ方面ニ於ケル日本ノ政治的管制ニシテ認容セララルコトアラハ、此等ノ市場ハ米國其ノ他諸國ニ對シ閉鎖セラルヘケレハナリ。

(七)日本人ノ移住　日本ノ過剩人口ノ捌口ニ關シテハ英國政治家中寧ロ亞細亞大陸ニ於ケル日本ノ自由手腕ヲ認メ。以テ自國領土ノ蠶食ヲ免ルルニ如カスト論スル者多シ。然レトモ是レ事實不可能ナリ。何トナレハ支那自身スラ其ノ過剩人口ヲ滿蒙西伯利等ニ吐キ出ス必要アリ。加之日本移民ハ是等北地ノ氣候ニ適セス、且支那人トノ競争ニ耐ヘサルカ故ニ、政府ノ補助獎勵厚キニ拘ラス、移住後一二年ニシテ郷土ニ歸還セサルヲ得サレハナリ。日本カ人種平等案ヲ提起シテ米濠大陸入國ノ權利ヲ得ムトシ、南洋諸島ノ

占有ヲ保續シテ太平洋ニ於ケル其ノ膨脹策ノ手段トシ、又加州土地法案ニ對シテ強硬ニ抗議セルカ如キ皆此ノ理由ニ出ルモノニシテ、米國ニシテ猶顧慮スル所ナクムハ、日本ハ加州問題ヲ國際聯盟ニ提起シ、事猶成ラスムハ、結局干戈ニ訴ヘテ所要ノ權利ヲ得ムトスルニ至ルヘシ。日本ハ今日加州問題ノ爲米國ト開戦スルノ意圖又ハ兵力ナシト雖、其ノ亞細亞經路策ニシテ現在ノ經過ニ委セラレムカ、日本ハ今後十五年ヲ出テスシテ自國及鮮支西伯利人ヨリ成ル五百萬ノ軍隊ヲ有シ、且支那及西伯利ノ巨大ナル資源ヲ左右シ、其ノ力能ク英國又ハ米國ト拮抗スルニ足ルニ至リ、米國ハ遙ニ獨逸ニ優ルノ強敵ト相對峙セサルヲ得サルニ至ラム。故ニ今日ハ列強カ仔細ニ日本ノ世界政策ノ基調タル所謂「吉田案」ナルモノノ真相ヲ檢スヘキ最要ノ時期ナリトス。

(八) 門戶開放ト放任政策　日本ニシテ東亞ニ優越的勢力ヲ占ムル限り、門戶開放政策ハ到底行ハルヘカラス。又日本ニシテ支那及西伯利征服ノ針路ヲ改メサル以上、列強ハ決シテ東亞ニ於ケル放任政策ヲ執ルヘキニ非ス。日本帝國主義者ノ無遠慮ナル行進ヲ抑止スルハ、列強ノ利權ト東亞五億萬民ノ幸福トヲ保全スルニ必要ナリ。

十二 學生欄

「フランク・ヘロン・スミス」氏(目下歸米中ノ監理派朝鮮宣教師)ハ、朝鮮人ノ獨立宣言書ヲ以テ大失策ナリト言明セシモ、專制政治ニ流ルル政府ヲ顛覆スルハ、人民ノ權利ニシテ又其ノ義務ニ非スヤ。氏ハ又

獨立運動ト基督教會及牧師トヲ餘リニ緊密ニ結ヒ付ケテ殆ト同心一體ノ觀アラシメタルハ失策ナリト曰ヘルモ、氏ハ一面ニ於テ獨立運動ハ多クノ非基督教徒ヲ含ムカ故ニ所謂基督教ノ運動ニ非スト曰ヘルハ何歟ソ。米國獨立ノ宣言書ニ於テモ「ジョン・ウイザースプーン」ノ如キ福音宣傳者ニシテ署名セシモノアリシニ非スヤ云々。

第二 米國著書

「韓國ノ復興」(The Renaissance of Korea)ノ梗概

本書ハ「ジョーゼフ・アツティントン・グレープス」大尉ノ著書ニシテ在米國費府朝鮮情報局ノ發行ニ係ルモノナリ

韓國ハ一九一〇年(明治四十二年)日本ニ併合セラレ、其ノ歴史ハ茲ニ無慘ナル終局ヲ告ケタリ。然レトモ實際ニ於テ今日韓國カ日本帝國ノ一領土タルハ、單ニ政治的意味ニ於テノミ。即チ單ニ威壓的且政治的ニ決定セラレタルノミニシテ。眞ノ問題ハ些モ決定セラレス、悠久ナル歴史ノ判斷ニ俟ツヘキ問題ナリ。故ヲ以テ東洋事情ノ研究者ニ取リテハ韓國ハ、依然トシテ韓國ニシテ、日本ニ非ザルナリ。

韓國ハ約四千年ノ歴史ヲ有スル老國ニシテ、夙ニ文學、宗教、工藝其ノ他有ラユル方面ニ著シキ進歩ヲナシ隣國日本ノ文化ノ爲貢獻セシ所頗ル多カリキ。然レドモ其ノ位置、日本及支那ノ中間ニ在ルカ爲古ヨリ常ニ兩國ノ脅威ヲ受クルヲ免レサリキ。其ノ一例トシテハ蒙古王成吉思汗ノ日本ヲ襲撃シタル時韓人ヲ

強制シテ、其ノ攻撃ニ加ハラシメタル爲、日本ノ怨恨ヲ買ヒ、爾來韓國沿岸ハ倭奴ノ間斷ナキ暴虐ヲ受クルニ至リシキカ如キ是ナリ。

怪漢秀吉ハ、先般「カイゼル」カ白耳義ニ對シテ行ヘルト同一事ヲ、已ニ三世紀前ニ於テ、韓國ニ對シテ試ミタリ。即チ征明軍ノ通路ヲ韓國ニ求メ、其ノ峻拒セラルルヤ、大軍ヲ派シテ韓國ニ侵入シ、大暴虐ヲ行ヒタリ。而モ此ノ時韓國ハ大ニ力戰シ、之ヲ擊退シタルノ歴史ヲ有ス。

韓國ハ十七世紀ノ初葉ヨリ日本及支那ニ對シ朝貢ヲ行ヒ始メタルカ、同國ハ支那及日本就中日本ヨリ間斷ナキ壓迫ト掠奪ヲ被リタル爲、全ク外國ニ對スル信賴ノ念ヲ失ヒ、自ラ其ノ門戸ヲ鎖シテ、鎖國主義ヲ採ルニ至レリ。故ヲ以テ十九世紀ノ中葉、大院君ノ治世ニ當リ、諸外國頻リニ通商ヲ求メタル際モ、韓國ハ悉ク拒絶シ來レリ。然レトモ世界ノ大勢ハ刻々ニ動キ、到底長ク鎖國主義ヲ固執スル事能ハサルニ至リ、後一八七六年（明治九年）ニ至リテ日本ト條約ヲ締結シ、獨立王國トシテ認メラルルニ至レルカ、其ノ後六年ニシテ京城ニ暴動起リ、日本人ノ殺サルルモノ九名ヲ算スルニ至リ、此ノ偶發事件ハ日本ヲシテ韓國併呑ノ口實ヲ獲セシムルニ十分ナリキ。

其ノ後國內ニ於テハ保守、進歩、兩黨ノ軋轢甚シク、政爭頻ニ行ハレタリ。一八八四年（明治十七年）進歩黨ハ日本軍ノ援助ニヨリ政權ヲ握リタルカ、僅カ二日後ニハ支那軍ニヨリ舊態ニ復セシメラレタリ。翌年日支間ニ條約締結セラレ、兩國ハ共ニ其ノ軍隊ヲ撤退シ、韓國ノ事ハ韓國自身ヲシテ處理セシムルコト

トナリタリ。其ノ後十年間西洋思想ノ流入ニヨリ幾多ノ改革行ハレタルカ、當時韓國ニ在リシ日本人ハ支那商人ノ平穩、正直ニシテ法律ヲ嚴守セシニ反シ、甚シク橫暴慘忍ニシテ、柔和、溫順ナル韓國人ヲ虐ケタリ。

日清戰爭ハ其ノ一部カ韓國領土内ニ於テ行ハレタル爲、韓國ハ深大ナル影響ヲ被リタリ。下關平和條約後、韓國ニ對スル支邦ノ勢力ハ全然失墜シ、日本ノ野心ハ次第ニ鮮明トナリ來レリ。此ノ時ヨリ日本ハ韓國ノ風俗習慣其ノ他ニ對シ、強制的改革ヲ行ヒ始メタルカ。爾來人工的進歩ノ強制ハ引續キテ行ハレ以テ現今ニ及ヘリ。日本ハ此ノ人工的進歩ヲ大ニ誇リ居レトモ、是ハ實ヲ云ヘハ、弱者ニ對スル強者ノ壓迫ニ外ナラサルナリ。

日本ノ韓國統治ハ、同期間ニ於ケル英國ノ愛蘭統治ニ均シク、愚ノ限リヲ盡シ、過失ヲ重ネ來レリ。此ノ期間ニ韓國ニ移住セシ日本人ハ、冒險家、罪人、無賴漢等最モ粗暴ナル徒輩ニシテ、韓人ハ彼等ノ爲甚シク虐ケラレタリ。其ノ當時井上伯ハ、日本人ノ韓國人ニ對スル態度ノ不可ナルヲ指摘シ、若シ其ノ態度ニシテ矯正セラレヌムハ、全然韓國人ノ敬愛心ヲ失フヘシト警告セシカ、此ノ忠告ハ無視セラレ、斯クテ、日本人ハ遂ニ韓國人ノ敬愛心ヲ永久ニ失フノ愚ヲ演スルニ至レリ。

此ノ頃露國ハ北部韓國併吞ヲ企テ居タルカ、日本ハ其ノ野心ヲ看破シ之ヲ妨ケムトシタル爲、遂ニ一九〇四年（明治三十七年）ノ日露戰役勃發スルニ至レリ。而シテ日本ハ強敵露國ヲ擊破シタル後、新ニ韓國

ト條約ヲ結ヒ、斯クテ韓國ニ對スル弔鐘ハ撞カレタリ。而シテ一九〇七年（明治四十年）「ヘーグ」密使事件起ルヤ、日本ハ遂ニ韓國ノ全政權ヲ奪ヒ、皇帝ヲ退位セシメタリ。其ノ後僅ニ三年即チ一九一〇年（明治四十三年）四千年ノ歴史ヲ有スル韓國ハ永久ニ滅亡シ、其ノ國土ハ日本ノ一領土トナレリ。此ノ舉タルヤ、無論史上稀ナル惡逆行爲ニシテ、日本ヲシテ之ヲ斷行セシメタルハ、蓋シ其ノ軍閥ナリ。

日本ハ韓國人ニ對シ甚タシキ人種的差別ヲ實行シ居レリ。彼等ハ蔑視セラレ、蹂躪セラレ、奴隸視セラレ、社會的位置ヲ占ムルコト能ハサルナリ。斯クテ窮地ニ陥レラレタル彼等ハ、最後ノ手段トシテ遂ニ革命運動ヲ起シ、之ニヨリテ日本ノ誤レル統治ヲ全世界ニ知ラシメム事ヲ期ス。由來韓國ハ日本ノ植民地統治能力ノ試金石ト目セラレ、而モ其ノ十年ニ互ル統治ノ結果ハ革命ノ外何物モ生マサリキ。是レ即チ日本ノ朝鮮統治カ時代精神及各國ノ經驗ニ反スルモノナル事ヲ證明シ、其ノ暴虐ナル統治ノ結果治者ト被治者トノ間ニ越ユ可ラサル嫌惡恐怖ノ深淵ヲ穿チ居ルヲ曝露シ、且日本ノ統治組織ノ獨逸軍閥ノ統治組織ト全然同一ナルコトヲ明瞭ニセルモノナリ。

日本ハ併合ニ際シ韓國内ニ於ケル不穩狀態ヲ一掃セシムコトヲ聲明セリ。全世界ニ對シテ聲明セラレタル此ノ目的ハ、夫レ自身頗ル善良ニシテ價值アルモノナレトモ、併合後ニ於ケル成績ハ極メテ不良、日本ハ内部ヨリシテ斯ル改革ニ著手スルコトヲ忘レ、徒ラニ形式ヲノミ改メトスル結果、國內ニ流血迫害、争鬪ノ慘事ヲ繰返ヘス外、他ニ何等施設スル所ナカリキ。斯ルハ神人共ニ憎ム所ニシテ、日本ニシテ速ニ其

ノ非ヲ覺リ悔悟スル所ナクムハ、終ニ獨逸ト等シク時代ニ對スル自覺ヲ有セサルモノトシテ、世界ヨリ孤立ニ待遇ヲ受クルニ至ルヘシ。

尤モ伊藤統監時代ニ於ケル各種ノ改革ハ賢明ニシテ好果ヲ齎シタリキ、又併合後ニ於ケル諸般物質的改革ハ、韓人ニ對シ幾多ノ利益ヲ齎シタルヲ疑ハス。然レトモ其ノ有ラユル改革ノ第一目的ハ韓人ノ利益ニ在ラスシテ在住日本人ノ福利増進及日本ノ政治的計畫ノ進展ニアリシ事ヲ牢記セサル可ラス。而シテ日本ノ韓人ニ莅ム方針ハ「同化カ否ラサレハ追放カ」ニシテ韓半島ヲ完全ニ日本領土ト爲サムカ爲、慘忍ナル秀吉スラ敢行セサリシ人種ノ根絶ヲ遂行セムコトヲ試ミタリ。サレハ以前二黨ニ分レ内争ヲ事トセシ韓人モ、今ヤ悉ク結束シテ起チ、有ラユル困苦犧牲ヲ忍ヒテ其ノ國家ノ獨立ヲ企ツルニ至レリ。即チ今日人種問題ノ喧シキ時ニ當リ、日本カ同化政策ヲ採レルコトハ誤謬之ヨリ甚シキハナキ事ヲ證明ス。之ニ就テハ日本ノ識者モ其ノ非ヲ認メムトシツツアリ。

或種ノ論者ハ日本ヲ辯護セムカ爲、日本ノ對韓關係ヲ英國ノ對埃及關係ト同一ナリト言フモ、兩者間ニ如何ナル關係アルヤノ問題ハ別トシ、此ノ比較ハ決シテ日本ニ取リテ好都合ナルモノニ非スシテ、唯埃及ノ状態ハ韓國ノ状態ト正反對ナル事ヲ證明スルニ過キス。又臺灣統治ヲ引用シ以テ韓國ニ對スル日本ノ現政策ヲ庇護セムトスル者アルモ、臺灣ニハ歴史ナク、統一セル人種ナク、且國民性アラサル爲、住民ハ毫モ愛國心ヲ有セス。是等ノ點ニ於テ韓國トハ全然相違シ居レリ。故ニ臺灣ニ於テ成功セル政策カ、韓國ニ

於○ア○モ○成○功○ス○ヘ○シ○ト○斷○定○ス○ル○ハ○暴○論○ト○謂○フ○ヘ○キ○ナ○リ

現下韓人ハ靈的方面ニモ顯著ナル進歩ヲナシ、基督教傳道ハ非常ナル好果ヲ擧ケ居レリ。彼等ハ從來ノ迷信ヲ離レ、光明ニ向ツテ進ミツツアリ。然ルニ一九一九年（大正八年）ノ獨立運動以來、基督教會ノ受クル迫害ハ次第ニ劇烈ヲ加ヘツツアリ。而モ此ノ獨立運動ハ久シキ以前ヨリ企畫セラレタル運動ノ爆發セシモノニシテ、決シテ暴動ト云フ可キ者ニアラス、平和的ナル示威運動タルニ過キス。然ルニ日本官憲ハ周章狼狽ノ餘、武力的鎮壓ヲ試ミ、可憐ナル多數ノ犠牲者ヲ生セシメタリ。國家ヲ愛スルノ至誠ノ爲ニ罪セラレタル老若男女ハ、恰モ野獸ノ如ク追窮セラレ、彼等ハ潔ク國難ニ殉シタリ、而シテ此ノ獨立運動ハ極メテ組織的ニ行ハレ、一個ノ農民ニ至ル迄威嚴ト自重的態度ヲ示シタリ。彼等ノ運動ハ極メテ秘密裡ニ計畫セラレ、其ノ示シタル態度ニヨリ彼等カ國民的精神ト政治的手腕ト組織的能力トヲ有スルコトヲ表示セリ。韓人ハ元ト勇敢ナル人種ナリシカ、今次ノ獨立運動ニヨリ彼等ハ昔ニ劣ラサル崇高ナル理想ト勇敢ナル氣象ヲ有スルコトヲ併セテ立證シタリ。是等ノ事ヲ綜合シテ考フルニ。韓人ハ確ニ一獨立國ヲ組織シ得ル國民ナリト謂フコトヲ得。然レハ日本人ハ徒ニ韓人ノ統治能力ニ乏シキコトヲ指摘シ之レヲ併呑ノ口實トスルモ、彼等カ此ノ點ニ於テ十分ノ能力ヲ有スルコトハ已ニ述ヘタル所。從テ日本カ爲ニスル所ノ宣傳ハ、世界識者ノ耳ヲ傾ケサル所ナリ。韓國ハ豊饒ナル富力ヲ有ス、韓人ハ懶惰ナル國民ニ非ス。故ヲ以テ若シ彼等ヲ外國ノ羈絆ヨリ脱セシメ自テ其ノ國運ヲ開發スルニ任セムカ、韓國ハ直ニ成功セル富裕ナル工

業國トナル可キヲ疑ハス。

予ハ本書ニヨリテ、何モ日本國民ニ對シテ反感ヲ表示セムトスル者ニアラス。日本ノ善良ナル國民ハ決シテ目下朝鮮ニ行ハレ居ル威壓的恐怖政治ヲ是認スル者ニアラサルコトヲ信ス。故ニ予ハ唯頑迷ニシテ人道ヲ無視スル軍閥ノ罪ヲ指摘セムト欲スルノミ、一九一〇年（明治四十三年）ニ於ケル併合當時ニ在リテハ、西洋諸國ハ小國ノ權利ニ對シ無關心ニシテ、無援ノ韓國カ強制的ニ併合セラレタルモ意トセサリシカ、今ヤ正義的觀念ニ醒メタル列國ハ朝鮮問題ヲ對岸ノ火災視スルコトナク、壓迫ニ苦シム韓人ヲ救済スルノ責任ヲ感シ始メタルハ事實ナリ。故ヲ以テ此ノ形勢ニシテ其ノ論理的結論ニ到達セムカ、韓國併合ノ舉モ結局徒勞ニ終ラサルヲ得サル可シ、韓國復興ノ機運ハ已ニ熟セリ。應テ總テノ障害ハ除去セラレ、韓國ハ昔ノ如キ權威アル獨立國トシテ、日本、支那、西洋諸國ト共ニ神ノ王國ナル新世界時代ノ光明ニ照ラサルルニ至ルヤ必セリ。

第三 獨逸斯聞

伯林日報 (Berliner Tageblatt) 記事摘要

一 獨逸暫設全國經濟會議ニ關スル要項 (一九二〇年七月一日號)

本年六月三十日在伯林舊普國貴族院ニ於テ豫テ準備中ナリシ新獨逸ニ於ケル一大經濟協議機關タル暫設全國經濟會議 (Der vorläufige Reichswirtschaftsrat) 開會セラレ、全國ニ於ケル各種經濟機關ノ代表者ヲ網羅セル議員ハ數週ニ互リ將來組織セラルヘキ全國經濟會議ノ組織及「スパー」協約ニ關シ討議ヲ爲セリ。而シテ同會議ニ於ケル分科ハ目下左ノ如シ。

一、農業及林業部

二、園藝及漁業部

三、工業部

四、商業、銀行及保險業部

五、交通及公共企業部

六、手工部

七、消費者部

八、職員及自由職業部

九、各地方經濟委員會

十、全國政府特選委員會

又同會議長ハ雇主側ヨリ之ヲ選出スルコトナシ、農業代表者元農務次官「フォン・ブラウン」氏之ニ當選シ、職工組合長「レギイン」氏副議長ニ選舉セラレタリ。而シテ開會ニ際シ宰相「フェレンバハ」氏ハ左ノ如キ陳述ヲ爲セリ。

獨逸國憲法ハ經濟生活及生産ニ參與スル各方面ノ能力ニ悉ク同等ノ權利ヲ與フルヲ以テ理想トナスモノニシテ暫設經濟會議ハ此ノ目的ヲ達成スル一大要素ナリ。從來存在セル各種職業ノ合同ハ諸種ノ點ニ於テ既ニ行詰リ發達ヲ見ス。如此形勢ノ下ニ各種ノ職業分科及各階級ハ其ノ利益代表機關ヲ統一シ以テ之カ發達ヲ圖ラムトスルヤ切ナリ。蓋シ全國經濟會議ノ組織ヲ必要ナラシムル要素實ニ此處ニアリ。此ノ要素ノ嶄新ナルト同様其ノ任務モ亦極メテ嶄新ナリ。又各種職業團體ヲ組織的ニ代表スル議員ヲ網羅セル一機關ヲ新設シ、之ヲ專ラ各種經濟問題ヲ討議スル所トナシ、從來獨逸全國議會ニ附議シタル議題中ヨリ經濟ニ關スルモノハ之ヲ分離シ、全國經濟會議ニ附議スルコトトナシ、全國議會ノ任務ヲ輕減スルハ絕對ニ必要ナリ。全國經濟會議ハ近キ將來ニ於テ建設セラルヘキモノナリト雖、之カ準備トシテ政府ハ先ツ暫設全國經

濟會議ヲ召集セリ。是レ政府ハ現下ノ形勢カ此ノ種ノ施設ヲ要スルコト急ナルヲ認メタレハナリ。

又政府ハ實際本會議カ獨逸經濟界ニ於ケル刻下ノ急務ヲ處理スルニ便スル所尠少ニアラサルヲ期ス。

本會議ヲ召集セル所以ハ單リ法律ノ定ムル所アルニ依ルモノナラスシテ寧ロ經濟界ニ其ノ意義ノ重大ナルニアリ。經濟問題ノ各人ニ關係アルコト今日ヨリ切實ナルハ無シ、各關係者ハ其ノ自己ノ利益ヲシテ全局ノ必要ニ順應セシムルニ於テハ全國經濟會議ハ即チ全世界ニ於ケル經濟國會ノ濫觴タルノミナラス、祖國ノ繁榮ヲ助長スル基礎タルヲ得ヘシ。

二 暫設全國經濟會議經濟政策委員會ノ決議案 (同七月二十四日號)

前記暫設全國經濟會議經濟政策委員會ハ同會議ニ對シ左ノ決議案ヲ提出セリ。

暫設全國經濟會議ハ左ノ如キ決議ヲ爲サムコトヲ要望ス。

全國經濟會議ハ聯合國代表者ガ「ルール」地域ノ占領ヲ以テ威嚇セルカ故ニ獨逸ノ署名セル「スパー」石炭協約ハ獨逸ノ經濟生活ニ對シ無限ノ負擔ヲ發生セシメタルモノト認ム。本協約ノ結果ハ石炭缺乏ヲシテ益激甚ナラシムヘシ。此ノ際ニ當リ國家及國民ヲシテ危機ニ瀕セサラシムト欲セハ直ニ石炭生産能力ヲ非常ノ程度ニ於テ昂上セシメサルヘカラス、而シテ此ノ目的ヲ達成セムトスルニハ炭坑労働者ノ努力ニ待ツ所多シ。然レトモ現今ノ營養ヲ以テセハ労働者カ此ノ條件ヲ充實スルコト不可能ナリ。體力、労働慾、労働集約ヲ必要ノ程度ニ昂上セシメムトスルニハ炭坑労働者及役員ヲシテ炭山ニ於ケル經濟事情ヲ知悉セ

シムルコト絶對ニ必要ナリ。是レ彼等ヲシテ鑛山業ニ於ケル事情ヲ一層明確ニ了解セシメ又共同經濟ヲ基礎トセル石炭經濟ニ對シ共ニ責任ヲ負ハシムル所以ナリ。全國經濟會議ハ一九二二年九月一日迄ニ完成セラルヘキ產業官公營調查委員會ヨリ報告ノ提出セラルルヲ待チ炭山公營 (Socialisierung) ノ種類及形態ニ關シ意見ヲ發表スヘシ。

又石炭供給ニ關シ既ニ承認ヲ經タル義務ヲ實行セムトスルニ當リ左ノ施設ヲ必要トス。

毎月九十萬噸ノ供給増加ヲ可能ナラシメムトスルニハ採掘能力ヲ昂上セシムルノ一途アルノミ。一時坑夫ヲシテ過度勞働ニ從事セシムルハ止ムヲ得サルコトニ屬ス。而シテ勞働増加ノ如何ハ各種坑夫組合トノ協議ヲ經之ヲ制定スヘキナリ。又坑夫ノ生活ヲ昂上セシメムカ爲ニモ總テノ手段ヲ講スヘシ。又他面ニハ農業ノ生産能力ヲ昂上セムカ爲ニ殊ニ肥料ノ改善ヲ圖ルヘキナリ。

又各坑區ニ於ケル勞働移住勵行ハ絶對ニ必要ナルモノヲ除キ其ノ他ノ工事ヲ中止スルモ之カ促進ヲ圖リ以テ速ニ坑夫ノ過剩從業ヲ全部又ハ一部のニ廢止スルヲ必要トス。

各坑區ニ於テハ雇主又勞働者各三名ヨリ成ル委員會ヲ組織シ經營及炭坑ニ關スル事情ノ檢察ヲ爲サシメ且特ニ炭質ノ査定ニ留意セシムルヲ要ス。而シテ同委員會ハ特殊任務ヲ遂行セムカ爲、又ハ外國ニ於ケル各種ノ改善事業ヲ調査セムカ爲之ヲ擴張スルコトヲ得。

又經濟的及交通的事情ヲ斟酌シ、石炭分配ノ勵行ヲ圖リ、且之ヲ確保スル爲ニ最モ峻嚴ナル施設ヲ爲ス

コトヲ要ス。殊ニ統一的施設ニ依リ瓦斯、水力及電氣經濟ニ對スル石炭ノ利用ニ遺憾ナカラシムルコトヲ圖ルヘシ。而シテ之カ條件ハ純經濟的及交通的の見地ヨリ全國ヲ若干ノ經濟區ニ區分スルニアリ。

褐炭ノ利用ハ可能的ニ之ヲ擴張セサルヘカラス。工事ハ之ニ順應セムカ爲ニ可能ノ場合ニ於テハ改修スルヲ必要トスルコトアラム。水力ノ利用モ亦直ニ之ヲ擴張スヘシ。

水陸交通設備モ石炭採掘ノ増加ニ適應シ熱力經濟モ亦各工場ニ於テ之ヲ督勵シ且之カ能力ノ昂上ヲ圖ルヘシ。各工業ハ奮テ自治ノ方法ニ基ク各種ノ施設ヲ爲スヲ要ス。「スバー」ニ於テ負擔セル義務ノ實行ヲ可能ナラシメムカ爲ニハ同地ニ於テ商議セラレタルカ如ク、獨逸經濟地域ニ對シ上部 シユ「レジャ」産石炭ノ供給セラルルコトヲ確保セサルヘカラス。

將來「ゲンフ」ニ於テ行ハルヘキ商議ニ對スル當事者ノ任務ハ全國經濟會議トノ提携ヲ以テ之カ準備ヲ爲シ、且其ノ商議ヲ進行セシメ、獨逸國ニ於ケル各般ノ復舊事業ト平時ニ於ケル石炭産出額トノ調和ヲ圖ルニアリ。獨逸國カ署名セル「スバー」協約ニ對シ獨逸全國民カ極力其ノ實行ニ努力セムコトヲ望ム。

【畢】

大正十年一月二十五日 印刷
大正十年一月二十八日 發行

朝鮮總督府

京城旭町貳丁目十番地

印刷所 京城印刷所